

# 国際化と都市づくり

法政大学教授 田村 明

## 1. はしがき

いま、各都市や地域で「国際化」が叫ばれ、その動きがさかんである。

「国際化」とは実は奇妙な言葉である。日本語のそのままの意味だと、国と国との際<sup>きわ</sup>であり、国という姿が強く打ち出されている。国という単位だけが優先しているのはおかしい話である。都市とか市民、あるいはNGO（非政府組織）などさまざまな形で、国をこえる関係があるのは当然である。

いま各都市でいわれている「国際化」は、国という単位だけでなく、都市の単位でも国境を超えた接触と交流の必要性を説いている。それなら「国際化」という用語は適切ではない。「市際化」「民際化」などという言葉も考えられるが、国境をこえた都市や市民の交流という意味では不十分である。「地球化」などという言葉の方が意味は正しいのかもしれないが、以下は、やむなく、「国際化」という言葉を用いておこう。

## 2. 新しい「国際化」の波

戦後の昭和20年代、「国際文化都市」「国際観光温泉文化都市」「国際港市」などという名を付けた特別立法が13も生れた。今も生きている法律なのだが殆ど忘れられている。これらの法律は憲法第95条によって住民投票にまでかけられているのだが、都市にとっても市民にとっても「国際化」はほとんど実態のないものに終わってしまった。これによってとくに国際的な都市づくりができたことは聞かない。

横浜や神戸などの港は、別に国際港市をいまさらうたわなくても安政以来の国際貿易港である。

昭和30年代になると姉妹都市の時代が始まる。アメリカのアイゼンハワー大統領の提唱する「ピープル・ツー・ピープル」の精神に基き、アメリカ諸都市と日本の都市の間で姉妹都市提携が積極的に行われた。昭和40年代になると、アメリカに限らず、ヨーロッパ、社会主義国、アジア諸国などとの間でも姉妹都市提

## 国際化と都市づくり

携が活発化した。

これは国対国ではなく、都市対都市でもなく、アイゼンハッワーのいうとおりに、民衆同志が交流することを意味づけた役割は大きい。しだいに儀礼的、親善的交流だけではなく、研修生・留学生の派遣・受入れ、都市専門家の交流、技術協力、見本市の開催、経済取引へのサポートなど多角的な内容に発展している。

初期の姉妹都市は、別に国際化の名ではよばれていない。今日の「国際化」の意味するような積極的姿勢ではなく、消極的な外国とのおつきあいという程度で、提携したはいいが、全く休眠状態という姉妹都市もあった。

しかし、現在の「国際化」はこうした時代とは少し異なっている。日本は貿易という国際関係の中で資源や食料、外貨を得ており、経済大国とまでいわれている。受動的な立場ではなく、すでに日本は積極的に国際社会に進出している。それにしても、都市レベルでの国際化はむしろ遅れているとあってよい。単なる外国とのおつきあい以上に、我々の日常生活も深く国際的關係の中におかれている。国まかせではなく、都市も市民も、自らの国際化を考えるのは当然のことになっている。

そうなれば、今日の都市の「国際化」は受け身のままではいられない。姉妹都市にしても実質的な都市間関係ができたために、結果として姉妹都市を結ぶケースも現れてきた。先きのべたように、姉妹都市を利用して、たんなる友好、親善以上の関係をつくりだすことに乗りだしているものもある。さらに、姉妹都市を結ぶ結ばないに関係なく、広く外国との交流を求める動きも活発化してきた。これらの新しい積極的な動きが、今日、都市の国際化といわれている。

それなら、今日、都市はどのような意味での国際化を図ろうとしているのだろうか。

その第1は、貿易面偏重であった国際関係を、もっと広く、文化的、学術的、人間的なものに広げようとする動きである。技術交流や文化交流、外人講師の招聘や、今年、名古屋で開かれたアジア・太平洋都市会議(NLAP)などはそうした動きである。

第2は、なんらかの意味で都市の活性化につなげようとするものである。各都市で国際博覧会が企画されたり、国際機関、あるいは大学などの誘致を行おうとしているのはその例である。

第3は、市民レベルでの自由な交流がのぞまれていることである。すでに500万人以上の観光客が国外に出て見聞を広めている。そうした市民の動きに応じ、これをバックアップする形で、市民や青少年、コーラスグループの国際交流がすすめられている。

とくに国際化の名でよばれてはいないが、このほかにも都市レベルでの重要な国際的な動きもある。そのひとつは、自治体による非核都市宣言や非核都市国際会議の開催である。これは、1982年6月ロンドンが非核都市宣言をしたのが最初だが、我が国でも、1986年1月現在で、5県835市区町村がこの宣言を行っている。

また、外国人居留者や外国人留学生・労働者の問題も都市にとっては大きな国際化に伴う問題になっている。国際化をとнаえる都市なら、外国人が如何に住み安く暮せるかも課題である。ロンドン、ニューヨーク、パリは、この点たしかに国際都市だが、東京でもまだへだたりが大きい。

このように広い意味の国際化による都市の問題は多様である。

### 3. 国際都市づくりの意味とその検証

国際化に伴う都市の問題は多いが、ここで「都市づくり」の観点から国際化の流れと対応を見てみよう。

いったい国際化された都市、つまり国際都市とはどのようなことを言うのであろう。これまでの国際化はかなり莫然とした意味で用いられてきたが、国際都市の意義をはっきりさせることによって、その目的に向けて都市づくりが行われるのが、国際化に対応した都市づくりということになろう。

そこで国際都市を、次のような性格をそなえているものとする。

- (1) 形態国際都市 — 外国の都市と似ていること。外国の商品が多数販売され、外国式のレストランが多様に存在している都市。
- (2) 経済国際都市 — 外国とのビジネス的交流がさかんで、貿易、金融取引などが活発に行われ、それらの会社や機関が立地する都市。
- (3) 政治国際都市 — 外国の大使館などが立地し、外交交渉や政治会議、外交儀礼の行われる都市。
- (4) 交通国際都市 — 外国との直接の門戸になる国際的海港、空港などの都市。

## 国際化と都市づくり

- (5) 文化、学術、人間国際都市 — 経済や政治以外にも、文化的、学術的、市民的交流がさかんで、外国人が多数訪れ、国際会議等の開かれる都市。
- (6) 国際機関都市 — 国際的機関、大学などの立地する都市。
- (7) 国際魅力都市 — 外国人にとって魅力があり、度々来訪してみたいという気をおこさせる都市。
- (8) 国際居住都市 — 外国人にとって安全で住みやすく、多数の外国人が居住している都市。
- (9) 国際人都市 — 外国人と対等につきあえる日本人が多数居住している都市。
- (10) 国際貢献都市 — 外国に対して何等かの役割りを持ち、貢献することのできる都市。
- (11) 国際都市 — 多様な外国人が居住し、どここの国とも判別のできない都市。

本当の国際都市とは、(11)のことをいうのかもしれないが、まだ島国日本がそこまですることは現在のところない。国際化した都市づくりとは、(1)~(10)のうちいずれか、あるいはその組合せとして考えられているのである。

そこで、このそれぞれの目標について検討してみよう。

- (1) 日本の都市は、このいみでは始めから国際化をねらっていたといってもよい。平城京、平安京はいうまでもなく唐の長安を模したものであり、明治以降の日本の都市づくりも、欧米を手本にしていた。しかし、幸か不幸か外国を模倣しながら、そのとおりになったことはない。外国に学ぶことはいいが、全く同じような都市になっては淋しい限りだし、それでは本家の方がよいにきまっている。あるいは、遊園地のような形でオランダ村をつくったりする次元にとどまるべきである。あまりにも外国に似て同一化することは、国際化とは反する方向にあるかもしれない。異なる国、異なる都市が交流しあえることが国際化なのである。とくに外国へ自由に行けるようになった今日ではなおさらである。

外国の商品が買えて、多数の外国式レストランがある点では、日本は最もすすんでいる、多様な機会があることは、都市にとって望ましいことである。だが、これも都市によって特色がでないと魅力がなくなる。本来の歴史から成り立つ特色のあるものにしておく必要がある。

- (2) この点では、かつての貿易港などの機能が薄れ、すべて東京に集中し、東京

だけが国際貿易、国際金融取引の中心になってしまった。ビジネスは集中を求めるから、この点で東京の状況を変えることはむずかしい。とすると、東京の場合は、別に国際都市づくりを目ざしたのではなくても、経済の原理で自然にそうなったのであり、逆に他の都市は努力しても、この意味の国際化は難しい。ただ、地域の特性を生かしてマイナーな点でも国際的關係をもつことも必要だろう。

- (3) かんたんに言えば首都機能ということになる。アメリカのワシントンとニューヨークのように、(2)と(3)の機能を分離しているのは賢明な方法である。日本がこのような形での国際都市をつくってゆくのは、首都の分都、展都、遷都のなかで国土次元での課題として考えてゆくことが必要であろう。
- (4) 国際港湾都市は、かつて最も重要な国際都市であった。それらの都市は、国際交通の要衝というだけでなく、人、物、情報が交錯し、自ずと、(1)、(2)、(5)、(6)、(7)、(8)などの要件をそなえるようになったことが国際都市といえる状況をつくったのである。

しかし、これらの都市は、特殊な歴史的、地理的条件で限られており、また、海港の役割が航空機の発達などにより相対的に薄れてきてしまった。単に交通的要素だけでは、今日ではそう積極的な国際都市とはいえない。海港都市の課題は、それをどう他の国際都市要素に結びつけられるかである。

空港は、海港に変わる位置を占めてきたが、かつての海港のようにそれ自体の都市形体要素は薄い。かりに、国際空港になったからといって、それだけで国際都市というわけではなく、他の要素にどうつなげられるかにかかっている。

- (5) (2)～(4)は、特殊な限定された都市以外ではむずかしいから、一般の都市として目標にする国際都市は、さしあたり(5)の意味が強くなる。また、政治や貿易などの国際取引だけでなく、人間同志の多角的なつながりが必要だとされている今日、このような国際都市を目ざすことは望ましい。ただ全都市が似たようなコンベンションシティといってみても、実際には機能しない。まず、人間同志が多様に多角的に交流しあえる機会をつくってゆくことが必要だろう。北海道池田町では、ワインの勉強に職員を外国に派遣する。福島県三春町は、新しい学校教育を目ざす中で、来日した外人教師を一緒に、ウイスクンシンの小さな町と交流し、今年の夏は中学生の1割にも当たる人々が渡米した。

## 国際化と都市づくり

富山県利賀村の国際演劇祭も、山奥の地に多くの人々を集める。都市の事情にあった交流の場をつくりだしてゆくべきであろう。

- (6) 具体化した機関や大学をおくことである。かつてウィーンでは、国際的な安全保障の意味からも積極的に国連機関を誘致した。日本では、東京だけに集中することのないように、政策的にも配慮されてよいであろう。ビジネスと異なり、立地選択の幅はかなり大きいはずである。
- (7) 外国人にとって魅力があるのは、(1)のようにどこにでもあるイミテーションの都市ではない。むしろ、日本でなければ味わえない特色をもつからこそ国際的にも魅力をもつ。京都、奈良はその例である。また、伝統的な魅力だけではなく、リゾートのような自然の魅力、また、創造的な活動が期待できる都市も魅力になろう。ただいずれの場合でも、日本のもつ独特の要素は必要で、(1)のようにどこの外国にでもあるようになれば、逆に外国人に魅力がなくなる。魅力ある都市は(5)のような交流や、(6)のような外国大学の立地なども期待できるかもしれない。
- (8) 今後の日本の課題は、外人居住の問題のウエイトが高まる。これは外人受け入れに関する国レベルの政策課題が大きい。アメリカはもとより、国際化された都市は、外人居住に伴う諸問題をかかえながら国際化している。

外人居住には、まず日本人にとっても重要な地価政策、住宅政策が必要だし、いかに、気安く生活できるかがポイントである。ロンドンに短期間住んでみたが、あまり外国人を意識しないですむ。日本では標識も問題になる。外国人は欧米人ばかりではない。シンガポールでは、英語、中国語、マレー語、インド語の表示がある。グルジアでは、グルジア語、ロシア語、英語の三列に表示されている。英語をつけねばすむのではなく、どういう表示がよいかは国際化を求める都市の課題である。

また、指紋押捺問題など、十分居留民を受け入れる態勢になっていないし、まだまだ市民意識の中でも、外国に対するわだかまりが多い。国際化社会に市民がどうついてゆかれるかが今後の国際化の大きな課題だし、各都市で考えてゆく具体的な問題になろう。

- (9) 国際化は日本人自身の問題でもある。言葉の問題はもとよりだが、それよりも、誰とでもわけへだてなく対等につきあえるコスモポリタンの感覚を育て

てゆく必要がある。偏見をもたず、自分と違う人々と対等にフランクに接することである。欧米人だからといって自らを卑下することなく、第三世界の人だからといって威ぶることはない。島国日本の中で、地球レベルの自由な交流ができるような教育が求められる。鹿児島のからいも交流は民間レベルで、外国人留学生と農民などの一般市民との交流をはかった。国がちがえば相異があるのは当然だが、互いの相異を認めあうことと、人間性に基づくホスピタリティがあれば、相互理解は成立つ。

#### 4. 地球時代の世界都市

都市とは、もともと農村とちがいで、外に開かれ、外と交流して発生し、成育した。地球も狭くなった今日、外とのつながりが国境をこえて国際化へすすむのは、都市の当然の方向である。すでに、地球時代に入っている。日本のように、世界の各地域や人々との関係で成立つ国であれば、なおさら都市にはいっそう国際化、地球化が求められる。その一方、今までの島国的な意識は、外に対して閉鎖的であった。都市の国際化は、こうした島国意識を変えてゆく役割を果たすことに意味がある。

国際都市とは、すでに見てきたとおり、外国の真似をすることではなく、独自のものをもち、魅力をもち、外国と接しられる人々や条件がととのって、多角的な交流をする都市をいう。

さらに、今後の地球時代の国際都市に必要なことは、前節の(10)にのべた、世界に対して、地球に対して何をうったえ得るか、何を貢献できるかである。そのような都市は、世界にとって、地球にとって、欠くことの出来ない「世界都市」である。四全総では、「世界都市」を、たんに情報・金融などの面で世界的なつながりをもつ中心都市という意味につかったが、これは、前節の国際都市の検討では、せいぜい(2)の次元のビジネス国際都市にすぎない。

京都市は、世界的な文化価値をもつために原爆投下をまぬかれたという。世界に対して意味をもち、地球上のかけがえのない都市になれば、小さな都市でもそれは世界都市である。

これまで国際化というと、外から良いものだけを取り入れ、利用することに目が向けられた。これからは逆に、外に向かって何が出来るかが問われている。こ

## 国際化と都市づくり

の点、昭和20年代の特別立法による国際都市は、実態は薄かったが、世界に対して役割を果たしたいという理念があった。

例えば、別府、伊東、熱海、松山の国際観光温泉文化都市では、たんなるレクリエーションや娯楽ではない。「この法律は、国際文化の向上を図り、世界恒久平和の理想を達成するとともに、観光温泉資源の開発によって経済復興に寄与するため、〇〇を国際観光温泉文化都市として建設することを目的とする。」とある。

また、奈良、京都、松江のような国際文化観光都市では、「世界において明びな風光と歴史的、文化的、美術的に重要な地位を有することにかんがみて、国際文化の向上を図り、世界恒久平和の理想を達成するとともに文化的資源の維持開発を図り、文化観光施設の整備によってわが国の経済復興に寄与するため」とうたわれている。

それなのに、その後の高度成長期は、理念を忘れ、世界を利用し、世界から稼ぐことばかりに走った。

今、日本の都市は、昭和20年代とは比べものにならないほど、世界に対してさまざまな意味と役割を果たしうるはずである。それを考えるのが、都市の国際化であり、そうした意味をもちうる都市は、地球時代の世界都市になりうるだろう。